

# 「場」の思想

## ——「場所論」とキャリア構成理論の比較分析——

木下 城 康

### 目 次

1. 序論
  2. 理論的枠組み
  3. 比較分析
  4. 結論と今後の課題
- おわりに

### 概要

本論は、伊東俊太郎の「場所論」とマーク・サビカスの「キャリア構成理論」を比較分析し、認識形成と自己理解のプロセスにおける新たな視座を探究する。場所論は認識の場所依存性を、キャリア構成理論は個人の社会文化的文脈での自己概念を扱う。本論は、両理論の共通点と相違点を明らかにし、特に両者が共有する「中動態」的な視点や対話のプロセスに注目する。また、場所論のキャリア支援への適用可能性を探り、包括的なアプローチの基礎を提示する。最後に、概念整理と統合、実践的応用の発展、応用領域の拡大という今後の研究課題を示している。

## 1. 序論

### 1.1 研究背景

20世紀初頭から現在に至るまで、キャリア支援理論は社会経済の変化と共に発展を遂げてきた。この発展は大きく三つの段階に分けられる。第一段階は個人と職業の特性のマッチングを中心とするマッチング理論、第二段階はライフステージに応じて変化するキャリア課題を扱うキャリア発達理論、そして第三段階は個人の内面におけるキャリアの理解を扱うキャリア・カウンセリング理論である。

この第三段階において、マーク・サビカスが提唱したキャリア構成理論は、個人が自らのキャリアストーリーを構成するプロセスに焦点を当てた革新的なアプローチとして注目を集めている。

一方、日本の比較文明学者である伊東俊太郎は、場所論（コーロロジー）<sup>1)</sup>を提唱し、認識の形成過程を「場」の概念から説明した。この理論は、認識が主体と客体の関係性の中で生成されること、そしてその関係性が成立する「場」の重要性を示している。

これら二つの理論は、異なる学問的背景から生まれながらも、個人の認識や自己概念の形成プロセスにおいて、共通点を有している。特に、両理論は対話的プロセスや環境との相互作用の重要性を強調している。また、両者は理論と実践の両面を理論に組み込む視点を持ち、純粋な理論構築にとどまらず、実践的応用も重視している。

筆者は、キャリアカウンセラーとしてキャリア支援を提供しつつ、キャリア心理学分野においてサビカスのキャリア構成理論を用いたキャリア・カウンセリング研究を行っている。筆者のキャリア支援への関心は、2016年と2017年の渡米期間中にサビカスから直接指導を受けたことに始まる。サビカスからキャリア構成理論に基づくキャリア・カウンセリングの実践的指導を受けた経験は、筆者がキャリアカウンセラーを志すきっかけとなった。以来、筆者はキャリア支援の理論と実践をサビカスの視点から捉え、これを他の理論と実践を評価する基準としている。

一方、筆者はおよそ10年間、伊東俊太郎を顧問とする研究機関の研究員を務めてきた。この間、毎月の定例研究会で伊東から直接指導を受け、同じフロアに研究スペースを持つことで日常的な交流も行ってきた。

このような経歴は、本研究に多層的な視点をもたらしている。筆者は、キャリア構成理論についてはその創始者サビカスから直接指導を受け、理論の本質と実践的応用について一定の理解を得た。また、伊東俊太郎の場所論（コーロロジー）については、長年の直接的な学びや対話を通じて考察を重ねてきた。この二つの異なる理論的背景は、両理論の比較分析において新たな視座を提供する。

## 1.2 研究目的

本研究の目的は、伊東の場所論とサビカスのキャリア構成理論を比較分析し、両理論の共通点と相違点を明らかにすることである。具体的には、以下の3点を主な目的とする：

- (1) 両理論の認識生成プロセスに関する考え方を比較分析する。
- (2) 両理論における「場」の概念、主体と客体の関係性、ナラティブの役割を検討する。
- (3) キャリア支援の理論と実践に対する新たな視座を提供する。

この比較分析を通じて、個人のキャリア発達をより広い社会的・文化的文脈の中で理解し支援するための統合的なアプローチの可能性を探ることを目指す。

## 1.3 比較対象の選定理由

本研究では、伊東の場所論とサビカスのキャリア構成理論を比較対象として選定した。この選定には以下のような理由がある。

---

1) 伊東俊太郎が提唱した理論。「場所論」(chorology、古代ギリシャ語の chōra「場所」に由来)。本稿では原則として「伊東の場所論」または文脈が明確な場合は「場所論」と表記する。

- (1) 両理論は認識生成の「場」に関する独自の視点を提供している。伊東の場所論は認識生成の場を取り上げ、サビカスの理論は個人のナラティブストーリーを認識生成の場としている。
- (2) 両理論における主体の位置づけに違いがある。伊東の場所論では主体 (S) は認識関係の構成項として存在するのに対し、サビカスの理論は主語を自己として明確に位置づけている。
- (3) 両者は学術的地位と影響力において対称性があり、異なる学問分野を橋渡しする役割を果たしている。
- (4) 両理論が理論と実践の統合を目指し、実践的応用可能性を考慮している。
- (5) 両理論ともナラティブの重要性を認識し、ナラティブが生成される時制を「いま」とし、その物理空間的場所を「ここ」としている点が共通している。

#### 1.4 論文の構成

本論は以下の構成で展開される。

第1章では研究の背景、目的、比較対象の選定理由から本研究の意義を示す。第2章では理論的枠組みとして、伊東の場所論とサビカスのキャリア構成理論の概要、核心的な概念、理論的背景、発展過程を説明する。第3章では両理論の比較分析を行う。まず主語の位置づけから基本的な類似点と相違点を明らかにし、それぞれの視点から相互の理論的位置づけを検討する。さらに両理論の統合的理解の可能性と課題を考察する。第4章では結論と今後の研究課題を示す。

## 2. 理論的枠組み

### 2.1 伊東俊太郎の「場所論」

#### 2.1.1 基本概念

場所論は、認識と知識の形成プロセスに関する理論である。基本概念は以下の三点である。

第一に、認識の場所依存性 ( $K=f(S, O)$ ) がある。

Ito (1995)<sup>2)</sup>は、次のように述べている：

「*La connaissance est à l'origine une relation entre le sujet et l'objet. Parce que cette relation elle-même est connaissance, le sujet et l'objet doivent être considérés comme un ensemble dès l'origine.*」(知識はもともと主体と客体の関係である。この関係そのものが知識であるから、主体も客体も最初から一体として考えなければならない<sup>3)</sup>)

第二に、主体と客体の関係性がある。

「*Il n'y a ni le sujet ni l'objet avant cette relation. Et le sujet et l'objet se forment dans cette*

2) Ito, S. (1995). La transformation de l'épistémologie et la notion du lieu (ba, chōra). Japan Review, 6, 127-130.

3) 本稿における外国語文献の和訳は、別途注記がない限り筆者自身による。

*relation elle-même. Il y a d'abord une relation cognitive et le connaissant (sujet) et le connu (objet) se trouvent aux deux termes de la relation.*」(この関係の前には、主体も客体もない。そして、主体と客体はこの関係そのもので形成される。まず認識関係があり、知る者(主体)と知られる者(客体)は、この関係の両端にある)

第三に、これらの関係性を成立させる「場 (ba)」の概念がある。伊東は次のように述べている：

*「en effet, la réalité de la connaissance n'existe ni dans le sujet ni dans l'objet, mais dans la situation totale qui établit le rapport entre les deux. C'est cette situation totale qui établit une relation f(s, o), que je voudrais l'appeler "ba" (le lieu) de la connaissance.*」(知識の实在は、主体にも客体にも存在せず、両者の関係を成立させる総体的な状況の中に存在する。この総体的状況こそが、関係 f(s, o) を成立させるのであり、私はこれを知の「場 (ba)」と呼びたいと思う)

この「場 (ba)」の概念を通じて、伊東の場所論は認識と知識の形成を、主体と客体の二元論的対立ではなく、両者の相互作用と「場」における生成プロセスとして捉え直している。さらに、この理論は個人レベル (sn, on) と社会・文化レベル (S, O) の相互作用も考慮に入れており、知識生成の多層的な性質を明らかにしている<sup>4)</sup>。

## 2.1.2 認識の場所依存性と構造化された認識モデル

伊東 (2008) は「認識論の変革と場所論」において、認識の場所依存性を以下のように定式化した<sup>5)</sup>：

$$K=f(S, O) \text{ ただし、} f(S, O)=ba$$

この定式化は、認識 (K) が主体 (S) と客体 (O) の関係性、およびその関係が成立する「場 (ba)」に依存することを示している。これは 2.1.1 で述べた基本概念をより形式的に表現したものである。

4) Ito, S. (1995) の場の概念について、以下のように論理化を試みる：

- ①  $K=f(S, O)$ ：知識は主体と客体の関係を示す関数
- ②  $K=R$ ：関係そのものが知識
- ③  $R=f(S, O)$ ：主体と客体の関係を示す関数
- ④  $R(S, O)=K$ ：R は主体と客体の間の認識関係を示す関数、K は認識関係そのもの
- ⑤  $K=f(S, O, ba)$ ：知識の实在は、主体にも客体にも存在せず、両者の関係を成立させる総体的な状況の中に存在する
- ⑥  $K=(S \wedge O)$ ：人がその人の世界観に基づいて、聞き、解釈し、説明するときに知識が生まれる。「*La connaissance humaine a lieu, quand on les entend, interprète, explique comme quelque chose d'après une vision du monde.*」(人間の知識は、世界観に基づくものとして物事を聞き、解釈し、説明することによって生まれる)
- ⑦  $K=f(sn, on, S, O)$ ：「*qu'une certaine vision du monde est toujours produite par une certaine société ou culture. La relation dans laquelle ces quatre facteurs, c'est-à-dire, petit sn, petit on, grand S, grand O se rapportent l'un à l'autre n'est rien d'autre que "ba" (le lieu) de la connaissance réelle.*」(ある特定の世界観は、常に特定の社会や文化によって生み出される。これら 4 つの要素、すなわち小さな sn、小さな on、大きな S、大きな O が互いに関係し合う関係こそが、本当の知の「場」にほかならない)
- ⑧ さらに伊東は「場」の探索の重要性を指摘している：「*Maintenant, nous avons besoin de rechercher ce qui existe au fond de le sujet et l'objet. C'est exactement la recherche de "ba" (le lieu), que j'ai discuté ici.*」(現在、私たちは主体と客体の奥底に存在するものを探す必要がある。これはまさに、ここで取り上げた「バ」(場)の探索である)

5) 伊東俊太郎 (2008). 認識論の変革と場所論. 公共研究, 4 (4), 5-16.

さらに、伊東は認識の社会的・文化的側面をより明確に示すため、以下の構造化された認識モデルを提示した。これを論理式化すると：

$$K=f(sn, S, P, on, O)$$

ここで、sn は個別の認識者、S は文化共同体、P は文化的または自然的な場所、on は個別の被認識者、O は被認識者の集合または抽象概念を表す。

このモデルについて伊東（2008）は「認識とは、ある文化共同体（S）に属する、ある認識者（s1）が、一定の文化的ないし自然的な場所（P）において、ある被認識者（o1）を（O）として認識する」と説明している。このモデルは、認識が単に個人的な過程ではなく、文化的背景、物理的・社会的環境、そして認識対象の性質が相互に作用する複雑な過程であることを示している。

### 2.1.3 認識の生成性と通態

伊東（2021）は「コーロロジー（場所論）再考」において、認識の概念がさらに発展し、以下が強調された<sup>6)</sup>：

(1) 認識の生成性：

$$K \rightarrow (S \wedge O) \quad (1995) \quad \text{から} \quad K \Leftrightarrow (S \wedge O)$$

この表現は、認識 K と、主体 S と客体 O が相互に存在を規定し合う関係にあることを示している。これは認識過程の動的な性質を強調するものである。

(2) 通態 (traject) の導入：

伊東（2021）は、主観 (subject) と客観 (object) の関係を論じる文脈において、「traject」という概念を導入している (p. 9)。この概念は「subject - traject - object」という形で示されており、主観と客観の関係において重要な位置を占めている。伊東は以下のように説明している：

「コーロロジーでは主観と客観との間の二元的対立を媒介する「結び役」として「通態」を置く。それは主語と述語を結びつけるものではない。むしろ、主観と客観の間を結びつける通態 (trajection) である」(p. 10)

さらに、通態の具体的な現れ方について、以下のように述べている：

「私のコーロロジーで「通態」は、自己と他者、自己と自然との間にある。自己と他者の間に「社会」、自然と自己の間に「風土」として、通態としての場所がある」(p. 11)

(3) 通態と場 (ba) の関係：

この文脈において、通態は場 (ba) の役割として「結び役、主観と客観との間を結びつける通態 (2021)」と明示された。

これらの発展により、認識プロセスは動的な関係性として捉え直された。主観と客観の

6) 伊東俊太郎 (2021)、コーロロジー（場所論）再考、モラロジー研究、86、1-17.

相互作用、およびそれを可能にする「場」の機能が、通態の概念を通じてより明確に示されている。

#### 2.1.4 理論の発展過程

伊東の場所論は、1995年から2021年にかけて発展を遂げた。1995年に提唱された場 (ba) は主体と客体の関係を成立させる「総体的な状況」として位置づけられた。2008年には「認識の場所依存性」が強調され、2021年には「認識によって主体と客体が生成される」という考えに発展した。「通態」という新しい概念の導入により、場 (ba) の役割と機能はより具体化された。

伊東の場所論は、知識や認識の生成における主体と客体の関係性を中心に据え、その関係性が成立する「場」の重要性を強調するものである。

#### 2.1.5 理論的課題

##### (1) 認識 K の本質と所有者の明確化

伊東 (2021) が提示した  $K \Leftrightarrow (S \wedge O)$  と  $K=f(\text{sn}, S, P, \text{on}, O)$  (2008) の関係において、認識 K の具体的な定義が不明確である。K が解釈、知識、認識なのか、あるいはプロセスを示すものなのかを明確にすべきである。また、この認識 K の「所有者」や「主体」についても、共同体としての S、O との関連性を考慮しつつ検討が必要である。

##### (2) 変数 n の再解釈と定式化

$K=f(\text{sn}, S, P, \text{on}, O)$  (2008) における変数 n の解釈は曖昧である。主体と客体に一致する n の設定は困難であり、 $K=fba(\text{sx}, \text{oy})$  という定式化の検討が必要である。特に、on が示す具体的な内容 (客体の状態や特性など) の明確化が求められる。

##### (3) 認識 K 形成プロセスの解明

$K=f(\text{sn}, S, P, \text{on}, O)$  (2008) において、各要素 (特に S や O) が不明確である。これらの要素の相互作用による K 形成プロセスの詳細な説明が求められる。

##### (4) 第三者視点の導入

$K=fba(\text{Sx}, \text{Oy})$  による知識・認識 K の生成プロセスを理解し評価するには、主体 (S) と客体 (O) の関係性に加え、第三者の視点が不可欠である。特に、場 (ba) のプロセスへの関与を明らかにすべきである。

##### (5) 評価・検証方法の確立

伊東場所論の評価・検証は、現在、対話を中心とした方法に限定されている。理論の妥当性や適用性を検証する新たな研究アプローチや手法の開発が必要である。

## 2.2 マーク・サビカスの「キャリア構成理論」

### 2.2.1 理論の背景と経緯

キャリア支援理論は次の三段階で展開してきた：

#### (1) マッチング理論：個人と職業の特性のマッチングを中心に扱う

- (2) キャリア発達理論：ライフステージに応じて変化するキャリア課題を扱う  
 (3) キャリア・カウンセリング理論：個人の内面におけるキャリアの理解を扱う。このカテゴリーにサビカスの理論が位置する<sup>7)</sup>。

サビカスは、キャリア発達理論の先駆者ドナルド・スーパーの研究を受け継ぎ、キャリア・カウンセリングの領域で活動してきた心理学者である。スーパーは、キャリア発達理論を構築したが、具体的なカウンセリングの実践方法を十分に示さなかった。この課題を解決するため、サビカスは具体的なカウンセリングの方法論の確立を目指して研究を進め、「キャリア構成理論 (CCT)」とその実践法である「キャリア構成インタビュー (CCI)」を確立した<sup>8)</sup>。

### 2.2.2 理論の概要

CCTの前提となる考え方は、「社会に適応することが個人にとっての社会生活における主要な動機<sup>9)</sup>」とするものである。Savickas, M. L. (2019) は CCT を次のように定義する：「*The theory of career construction explains the interpretive and interpersonal processes through which individuals organize themselves, impose direction on their vocational behavior, and make meaning of their careers.*」(Savickas, M. L., 2019, p. 3) (訳：キャリア構成理論は、個人が自分自身を組織化し、職業行動に方向性を与え、自らのキャリアに意味を持たせる解釈的および対人関係的なプロセスを説明する。)

CCTは「自己をプロセスとして扱う (self-as-process)」という視点を採用し、「キャリアは、個人が自分の仕事人生について語るストーリーになる」(p. 3) とする。

CCTには、コンテンツとプロセスの2つのモデルがある：

- (1) コンテンツモデル：キャリア構成の現象を理解するために使用される概念は何か
- (2) プロセスモデル：その概念はどのように機能し、変化するのか

Savickas, M. L. (2019, pp. 11-13) は、自己の位置づけと枠組みを以下のように整理する。

プロセス (心理的自己)	認知スキーマ	戦略コンテンツ
Actor (行動する主体)	Attachment (愛着)	Disposition (気質)
Agent (調整する主体)	Motivation (動機)	Adaptability
Author (自伝著者)	Reflexivity	Identity

### 2.2.3 心理的自己の役割

- (1) アクターとしての心理的自己の役割

7) 本稿ではキャリア構成理論の詳細な説明は紙幅の都合上省略する。キャリア構成理論の詳細については、木下 (2017)、木下 (2019) を参照されたい。

8) Savickas, M. L. (2011). *Career Counseling*. American Psychological Association.

9) Savickas, 2019, p. 5

アクターは、愛着と気質を体系立て、家族内での自分の位置を共構成する。ここでの中心的課題は「自分はどのように振る舞うべきなのか」である。

#### (2) エージェントとしての心理的自己の役割

エージェントは、自己調整プロセスを通じて自分の知覚・感情・行動を社会に適応させる。自己と一致する社会的ポジションを目指して人生を方向づけ、このプロセスでは、動機と適応に焦点を当てる。

#### (3) オーサーとしての心理的自己の役割

オーサーは、自分の行動に関する連続性をもつストーリーを熟考して著述する。思春期後半から成人期初期にかけて、主観的な「私 (I)」は客観的な「私 (Me)」について熟考する。この思考プロセスはリフレキシビティ (Reflexivity) の認知スキーマによって行われる。

リフレキシビティは、自己の内省をさらに内省する認知スキーマであり、過去の経験や認識を現在に適用して、それを基に現在の状況や課題を未来へと展開する。職業ガイダンスとキャリア教育が現在を基点に過去を振り返る形で内省を促すのに対し、キャリア構成カウンセリングはその内省を深め、現在の状況や課題を未来へとつなげる。このリフレキシビティにより、単なる量的な変化 (例：やり方を変えずに量を増やす) から質的な変化 (例：やり方や見方そのものを変える) へと移行する。

### 2.2.4 対話の機能と役割

Savickas, M. L. (2019, pp. 42-43) により、CCT におけるキャリア支援の対話は以下の3つに分類される：

#### (1) 職業ガイダンス

個人をアクターとして捉え、適合する職業集団へのマッチングを行う。

#### (2) キャリア教育

個人をエージェントと捉え、発達課題や職業上の転機への適応戦略を伝える。

#### (3) キャリア構成理論によるカウンセリング

個人を自伝のオーサーと捉え、その独自性を基に未来のシナリオを作成する。内省によりキャリアテーマを変化させ、実現可能な未来志向のキャリアのシナリオを構成し、職業選択や可能性を広げる。

### 2.2.5 特徴と課題

CCT はキャリア支援の枠組みにおいて、以下の特徴と課題を持つ：

(1) 利用者の限定：キャリア支援実践者を対象とし、専門家に限定される。

(2) 訓練の必要性：CCI と共に適切な活用には専門的な訓練が必須である。

(3) 実施場所の限定：面談室または教室を主な実施場所とする。

(4) 前提の検討：社会適応への動機づけを基本とする前提の適切性を検討する必要がある<sup>10)</sup>。

- (5) 対象の限定性：個人を対象とし、特にクライアントを「自伝の著者」として位置づける点について、その意義と限界を検討する必要がある。
- (6) 研究の難易度：実践研究のアプローチ方法が限定的である。
- (7) カウンセラーの力量と不確定性：カウンセラーのスキルやクライアントの状態により結果が異なる。この変動要因への対応と不確定性の許容が課題である。
- (8) マッチングの影響：カウンセラーとクライアントの相性が結果に影響を与える。
- (9) 一貫性の欠如：キャリア支援理論の各要素の関係性やカウンセラーの育成の考え方が不明確である。これにより理論と実践の改善や発展研究が求められる。
- (10) 能動と受動の限界：CCTは受動から能動への転換や変化を促す。また、社会適応のためのキャリアストーリー作成により選択肢を増やすことを提案する。しかし、能動と受動の二分法自体の見直しが必要である。次章で述べる中動態の世界観により、個人を中心とした行動や変化の新たな視点を提供できる。

### 3. 比較分析

#### 3.1 主語の位置づけ

##### 3.1.1 中動態の解釈

場所論とキャリア構成理論は、主語の位置づけに共通点を持つ。Benveniste, E. (1950)の中動態の定義に基づき、両論の共通性を検討する<sup>10)</sup>。

「*Dans l'actif, les verbes dénotent un procès qui s'accomplit à partir du sujet et hors de lui. Dans le moyen, qui est la diathèse à définir par opposition, le verbe indique un procès dont le sujet est le siège; le sujet est intérieur au procès.*」(p. 172) (訳：能動態では、動詞は主語から始まり、主語の外で行われるプロセスを示す。対照的に定義される中動態では、動詞は主語がプロセスの中心であることを示す。つまり、主語はプロセスの内部にある。)

中動態の視点から見ると、伊東場所論の  $K=f(S, O)$  とキャリア構成理論の「オーサー」の自己概念は、主体がプロセスの中心にあり、内部から認識や物語を構築する点で共通する。

##### 3.1.2 場所論における主体

伊東 (2021, p. 7) は「落日の美」の例により、認識の生成過程を説明する<sup>12)</sup>。

「美しい」という認識 (K) は、私 (S) と太陽 (O) の関係性から生成される。この認識は、私 (S) の内部にも、太陽 (O) の属性にも存在せず、両者の関係性から生まれる。

10) Savickas, M. L. (2019). *Career Construction Theory: Life Portraits of Attachment, Adaptability, and Identity*. Routledge, p. 5.

11) Benveniste, E. (1950). Actif et moyen dans le verbe. *Journal de Psychologie*, 43, 121-129.

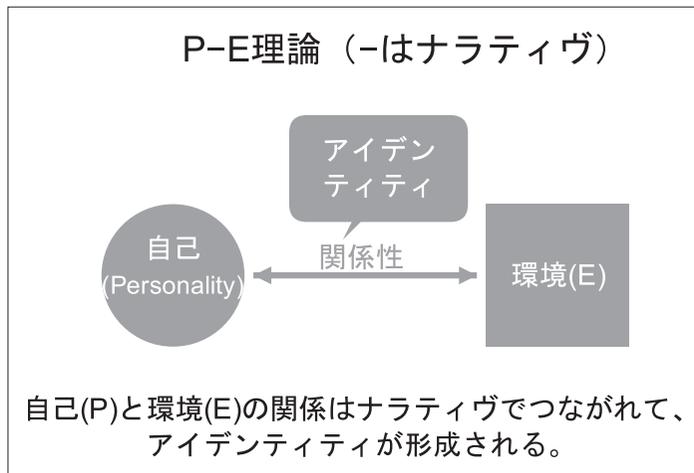
12) 伊東の原文は以下の通り：「その「美しい」というのは僕の中にあるんでしょうか。どうですか、私 (S) の中に。あるいは私じゃなくて太陽、つまり対象 (O) のなかにあるんですか。そうじゃないですね。それはまさに、僕とそのときの太陽との関係の中に、その美しさがある。それが結び付けられている。」(伊東, 2021, p. 7)

この例は、自己認識が対象との対話や関係性を通じて生成されることを示す。

### 3.1.3 キャリア構成理論における自己

キャリア構成理論はP-E理論を基盤とする。P-E理論では、個人(P)と環境(E)の相互作用がナラティブ(N)により解釈・言語化されて、アイデンティティ(I)を構成する( $I=N[f(P,E)]$ )。このナラティブ(Nn)作成過程における自己概念は「オーサー(自伝著者)」である。

図1 P-E理論におけるアイデンティティ形成モデル



注：キャリア構成理論における個人(P)と環境(E)の関係性がナラティブ(N)を通じてアイデンティティ(I)を形成する過程

以上の検討から、両理論における主語の位置づけと認識生成過程の特徴が明らかになった。次に、これらの理論がどのように相互に関連し、補完し合う可能性があるのかを検討する。

## 3.2 場所論からの理論的位置づけ

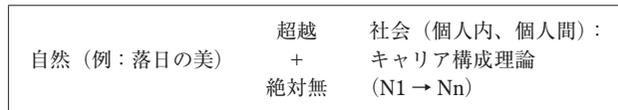
### 3.2.1 場所論からの視点

場所論とキャリア構成理論は、主体と客体の関係性に基づく認識の生成という点で共通する。場所論では、場所(P)における主体(S)と客体(O)の関係により認識(K)が生成される。一方、キャリア構成理論は、「Life is a story (人生は物語である)」を基盤とし、人生の場所をストーリーの中に位置づける。この理論は、「著者」という第三者視点により、初期のストーリー(N1)から新たなストーリー(Nn)を構成する。この認識の再構成プロセスは、個人の未来への選択肢と可能性を広げる。

キャリア構成理論は伊東場所論の枠組み内で、個人の内的対話とストーリー構築に重点を置くアプローチとして解釈できる。両理論は、対話的プロセスを重視し、社会的実践に

において相互補完的な関係にある。また「場所」あるいは「ストーリー」という概念により、主体と客体の相互作用から生じる認識や意味の創出プロセスを説明する点で共通する。このアプローチは、人間の経験と認識を理解する新たな枠組みを提示している。

図2 伊東場所論におけるキャリア構成理論の位置づけ



注：縦軸は超越から絶対無まで、横軸は自然から社会までの領域を表す

本図は、伊東場所論とキャリア構成理論の関係性を視覚化する。伊東場所論の縦軸は「超越」から「絶対無」まで幅広い領域を包括し、横軸は自然と社会における認識のプロセスを説明する。一方、キャリア構成理論は「社会」領域、特に個人内および個人間の相互作用に焦点を当てる。

この構図により、両理論の補完的關係が明確になる。伊東場所論の広範な認識論的枠組みの中で、キャリア構成理論は社会的文脈における個人の内的対話と自己理解に特化したアプローチとなる。例えば、「落日の美」という自然現象の認識は、伊東場所論の枠組みで説明できる。物理空間的場所（P）において主体（S）と客体（O）の関係により認識（K）が生成され（ $K=f(S, O, P)$ ）、この認識は、主体（観察者）と客体（落日）の関係性から生まれる。

キャリア構成理論は、個人のキャリアストーリー構成過程を扱う。自己は環境との出会いによりナラティブ・アイデンティティを構成し、自己認識はこのアイデンティティ内に存在する。サビカスは「著者」という第三者的自己概念を導入し、自己のストーリーを客観的に語る視点を設定して、初期のストーリー（N1）から新たなストーリー（Nn）への展開を可能にした。

両理論の統合的理解は、キャリア支援実践に重要な示唆を与える。クライアントの「場」（社会的、文化的、職業的環境）を理解し、その中で自己理解と未来構想を支援する複合的なアプローチが可能になる。これにより、個人のキャリア発達を社会、文化、自然との相互理解の中で生じるプロセスとして捉えることができる。

### 3.3 キャリア構成理論からの理論的位置づけ

キャリア構成理論では、認識と存在の場を規定する中心的概念としてP-E理論がある。これは従来のPE理論（ $I=f(P, E)$ ）を発展させ、個人（P）と環境（E）の相互作用がナラティブ（N）を通じて解釈・言語化され、アイデンティティ（I）が構成される（ $I=N[f(P, E)]$ ）という理論である。P-E理論の核心は、認識と存在の自己像が、個人の人格（P）と環境（E）の出会いにより生成されるナラティブストーリー内に存在する点にある。サビカスはこのプロセスで形成されるアイデンティティを「ナラティブ・アイデンティ

ティ』<sup>13)</sup>と呼び、私たちの人生の所在、すなわち「場所」は、このストーリー内に存在するとしている。

この理論的枠組みの中に伊東場所論を位置づけると、次のような解釈が可能である。伊東が提唱する認識と存在の場 (ba) は、P と E の相互作用により生成されるナラティブ・アイデンティティ (I) のストーリー内に存在する。また、この ba は、ナラティブ (N) を通じて個人の人格 (P) と環境 (E) の相互作用を媒介する役割を持つ。これは、ba=N [f(P,E)] と表現することができる。

このように、伊東の「場 (ba)」は、キャリア構成理論におけるナラティブストーリー内に内包される概念として解釈できる。この解釈では、個人の認識や存在の「場」は、個人の人格的特性と環境との相互作用（伊東のいう「関係」）により生み出される物語内に位置づけられる。

### 3.4 統合的理解：可能性と課題

#### 3.4.1 統合の意義

キャリア構成理論の枠組みにおける伊東場所論の位置づけにより、両理論の相補的な関係が明確になり、キャリア支援の理論と実践に新たな洞察をもたらす可能性が広がる。

具体的な意義として以下が挙げられる：

##### (1) 個人の認識プロセスの包括的理解：

伊東場所論の包括的な認識論的枠組みとキャリア構成理論のナラティブストーリーへのアプローチを組み合わせることで、個人の認識形成をより多角的に捉えることが可能になる。

##### (2) キャリア支援の深化：

クライアントの「場」と「ナラティブ」を同時に考慮することで、包括的なキャリア支援が可能になる。伊東場所論（コーロロジー）の「場」は、「われわれ」や「私たち」という集合的主体を含む包括的理論であり、現在を基点とした過去・未来の時間軸を含む認識生成の場を提供する<sup>14)</sup>。一方、キャリア構成理論は、「わたし」という個人的主体のナラティブストーリー構成の場を捉え、過去・現在・未来への展望を含む時間を扱う。

コーロロジーの「場」をキャリア支援に取り入れことで「いま、ここ」での相談者の認識生成と、その認識が集合的文脈の中で形成される過程の両方に注目できる。両理論の統合により、個人のキャリア構築プロセスを広い社会的・時間的文脈の中で理解し支援することが可能となる。

##### (3) 理論的發展：

13) Narrative Identity: An autobiography that provides life with meaning and purpose. (訳：人生に意味と目的を与える自伝的な物語) (Savickas, M. L., 2019)

14) 伊東 (2021) は、参加者からの質問に答える形でコーロロジーに時制が含まれることを述べている。具体的には、コーロロジーの「場」が現在の他者だけでなく、過去の死者や未来世代をも包含するという。この視点は、コーロロジーが単に現在の状況だけでなく、過去からの影響や未来への展望を含む広範な時間的文脈を考慮していることを示唆している。

両理論の統合は、認識論とキャリア発達理論に新たな展開をもたらす。キャリア構成理論における重要概念、ナラティブストーリーを企画する主体としての自己 (projective self)、すなわちオーサーとしての自己は、キャリア支援理論の発展過程で生まれた。この自己概念は、個人が自らのライフキャリアを物語の中に構成し、意味づける過程の理解に重要な役割を果たす。コーロロジーはキャリア構成理論の自己概念に理論的基盤を提供し、理論のさらなる発展を可能にする。特にコーロロジーの公共社会概念は、キャリア支援の適用範囲を個人・組織レベルから社会・環境全体へと拡張する可能性を示す。

### 3.4.2 批判的考察

キャリア構成理論と伊東場所論の統合は、個人のキャリア発達と自己認識のプロセスに新たな洞察をもたらす一方で、課題や限界も存在する。主要な批判的論点は以下の通りである。

(1) 概念的整合性の問題：両理論は異なる学問的背景（キャリア心理学と哲学）から生まれ、概念や用語の定義に違いがある。伊東場所論における「場 (ba)」とキャリア構成理論の「環境 (E)」の概念的重なりと差異の明確化が必要である。また、伊東論の主語は「われわれ」、キャリア構成理論の主語は「わたし」という違いがあり、これらの概念的差異の調整なしでの統合は理論的混乱を招く可能性がある。

(2) 適用範囲の差異：伊東場所論は広範な認識論的枠組みを提供し、キャリア構成理論は具体的なキャリア支援の文脈に焦点を当てる。この適用範囲の差異は、統合的アプローチの実践的応用を複雑にする。特に、伊東場所論の抽象的概念をキャリア支援への適用方法が課題となる。

(3) 文化的バイアス：キャリア構成理論は、西洋の個人主義的文化を出発点とし、東洋的発想や多文化との交流により発展した。一方、伊東場所論は西洋の学術体系に精通した日本人学者による理論である。この対比は、東洋的発想を理解するアメリカ人と西洋的発想を理解する日本人の対話として捉えられる。ただし、この前提では日本の文化的文脈における「わたし」支援の意味や意義を十分に探求できない。両理論の統合には、この文化的観点からの再検討を要する。

(4) 実証的検証の困難さ：両理論の統合的アプローチの有効性検証は困難である。特に、伊東場所論の抽象的な概念の操作化と測定可能な変数への変換には課題が多い。統合的アプローチの科学的妥当性確立には、新たな研究方法論の開発が必要となる。

(5) 実践者の専門性の問題：統合的アプローチの効果的实践には、キャリア支援の専門知識に加え、哲学的・認識論的な深い理解が必要となる。このことは、キャリアカウンセラーや支援者の教育・訓練に新たな課題を提起する。

### 3.4.3 実践的示唆

両理論の統合的理解から、キャリア支援実践への具体的示唆を以下に整理する。

(1) 認識形成プロセスへの注目：

クライアントの認識が形成される「場」への注目は、キャリア支援における対話の質を高める。特に、「いま、ここ」での認識生成プロセスへの着目により、クライアントの現在の体験をより深く理解できる。

(2) 個人と集団の視点の統合：

コーロロジーの「われわれ」の視点とキャリア構成理論の「わたし」の視点の統合により、個人のキャリアを社会的文脈の中でより豊かに理解できる。これは個人の課題を社会的な文脈で捉え直す機会を提供する。

(3) 時間軸の拡張：

両理論の統合は、現在を起点とした過去の経験の意味づけと未来への展望の包括的な理解を可能にする。これにより、クライアントの時間的展望を広げ、より豊かなキャリアストーリーの構築を支援する。

(4) 支援者の役割の再定義：

支援者は聴き手や助言者を超え、クライアントとの「場」の共創者として、新たな認識や物語の生成を促進する役割を担う。これにより創造的で協働的な支援関係を構築する。

(5) 実践の評価基準の拡充：

支援の成果を、課題解決や目標達成に加え、認識の質的変化や社会的文脈における意味の創出から評価する。これにより支援の効果をより多面的に捉える。

(6) 支援実践の質的深化：

キャリア支援は、職業選択や能力開発を超え、個人の関係論的な「場 (ba)」の生成とナラティブストーリーの変容のプロセスとして捉え直せる。クライアントの「場 (ba)」の理解には、人格的特性と環境との相互作用、およびそこから生まれるナラティブストーリーの総合的考慮を必要とする。これによりキャリア支援は、哲学的な自己理解と人生の意味づけを促進する実践、すなわちコーロロジーの実践の場として再定義される。

(7) 新たな支援手法の可能性：

コーロロジーの世界観（縦軸に超越と絶対無、横軸に自然と社会を対置する四象限モデル）の活用は、新たなキャリア支援手法の開発を促す。この包括的な概念理解により、支援者と相談者は「いま、ここ (here and now)」における「囚われ (サビカスのいう pre-occupation)」からの脱却を図れる。

(8) 総合的展望：

両理論の統合的理解は、より豊かで包括的なキャリア支援の理論と実践への新たな展望を示す。コーロロジーの四象限モデルとキャリア構成理論の実践手法を組み合わせ、個人の認識変容を立体的に支援できる。

## 4. 結論と今後の課題

### 4.1 結論

伊東俊太郎の場所論とマーク・サビカスのキャリア構成理論の比較分析から、以下の結

論を得た：

(1) 主語の位置づけ

両理論は、主体を認識プロセスの中心に位置づける「中動態」的視点を共有する。

(2) 認識の生成プロセス

両理論は、認識やストーリーの対話的プロセスによる生成を強調する。

(3) 「場」の概念

両理論は、認識と自己概念の環境との相互作用による形成を示す。

(4) 第三の視点の導入

キャリア構成理論における「オーサー」概念は、伊東場所論の枠組みと相互補完的な関係にある。

(5) 実践への応用

両理論は、社会環境や自然との対話的プロセスの重要性を示唆する。

(6) 理論の統合可能性

両理論の統合的理解は、個人のキャリア発達のより包括的な把握を可能にする。

(7) 文化的差異の考慮

両理論の文化的背景の相違から、統合における課題と可能性を明示した。

## 4.2 今後の課題

本研究を通じて明らかになった課題は、以下の三領域に分類される。

### 4.2.1 理論的基盤の強化

(1) 概念整理と統合

- ・「場 (ba)」と「環境 (E)」の概念的整理
- ・文化依存性と普遍性の検討
- ・中動態的視点の理論的位置づけの確立

(2) 方法論の確立

- ・両理論の実証的検証方法の開発
- ・長期的効果の評価研究の確立
- ・統合的アプローチの有効性検証手法の構築

概念整理の進展と方法論の確立は、相互に支え合う循環的關係にある。

### 4.2.2 実践的応用の発展

(1) 支援手法の開発

- ・リフレキシビティを活用した対話技法の確立
- ・文化的差異を考慮した支援アプローチの開発
- ・日本の文化的文脈における「わたし」支援の方法論確立

(2) 実践者の専門性向上

- ・統合的アプローチを実践に向けた教育・訓練プログラムの開発
- ・哲学的・認識論的理解を含む実践者育成カリキュラムの確立

これらの実践的課題は、理論的知見をキャリア支援実務へ橋渡しする役割を担う。

#### 4.2.3 応用領域の拡大

##### (1) 学際的展開

- ・教育学、組織論、経営学など他分野への理論適用
- ・各分野における実践モデルの開発

##### (2) 社会的実装

- ・組織や教育機関での実践プログラムの確立
- ・効果測定と改善サイクルの構築

これらの課題は、理論的基盤の強化と実践的応用の発展に基づき、両理論の社会的価値の最大化を目指すものであり、段階的かつ相互補完的に取り組む必要がある。理論的基盤の強化は他の課題の土台となるため優先的な取り組みを要する。また、実践からのフィードバックは理論の精緻化に不可欠であり、理論と実践の循環的な発展を促す。

#### おわりに

本論は、認識論とキャリア支援理論の新たな接点を探る試みである。伊東俊太郎の場所論が提示する「場」の概念とマーク・サビカスのキャリア構成理論における自己構成プロセスの比較により、両者の理論的共通基盤と相補性が明らかになった。

とりわけ注目すべきは、両理論における中動態的視点の共有である。この視点は、主体と環境の二元論を超え、関係性の中での認識生成という新たな理解を示す。本考察は、キャリア支援における理論的枠組みの再構築に向けた基礎的視座を提供するものといえる。

今後は本考察で得られた知見に基づき、理論的精緻化と実践的検証の両面からの研究を進めていきたい。

#### 参考文献

- Benveniste, E. (1950). Actif et moyen dans le verbe. *Journal de Psychologie*, 43, 121-129.
- 伊東俊太郎 (1995). La transformation de l'épistemologie et la notion du lieu (ba, chôra). *Japan Review*, 6, 127-130.
- 伊東俊太郎 (2008). 認識論の変革と場所論. 公共研究, 4 (4), 5-16.
- 伊東俊太郎 (2021). コーロロジー (場所論) 再考. モラロジー研究, 86, 1-17.
- 木下城康 (2017). サビカス ライフデザインカウンセリングにおける自己構成の特徴: 自己・アイデンティティ形成との比較を通して. モラロジー研究, 80, 1-19.
- 木下城康 (2019). モラロジー研究史における人間観・自己観の特徴と課題—「価値実現」から「意味創造」に向けた対人援助論アプローチ—. モラロジー研究, 82, 15-33.

Savickas, M. L. (2011). *Career counseling*. American Psychological Association.

Savickas, M. L. (2019). *Career construction theory: Life portraits of attachment, adaptability, and identity*. Routledge.

サビカス, M. L. (2023). サビカス キャリア構成理論 四つの〈物語〉で学ぶキャリアの形成と発達 (水野修次郎・長谷川能扶子、監訳). 福村出版. (原著 2019 年出版)

(キーワード：コーロロジー、キャリア構成理論、中動態)

